

# 保育者養成校におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業形態

水 津 玉 美

A practical report on active learning teaching methods  
at nursery school teacher training school

by  
Tamami Suizu

## 要旨

本稿は、保育者養成校での授業の中で、学年による意識の違いや学びの形態による授業の在り方、授業方法に関する考察を述べたものである。従来の講義型に現場の知識や現場観点を盛り込んだ授業と近年、大学教育の充実を図る上で、大学の授業改革として提起されているアクティブ・ラーニングの授業形態、演劇的手法を取り入れた授業形態を試みた。能動的な学習が実現できるよう授業形態や課題の工夫を行った過程を述べ、限られた授業時間の中で、現場で役立つ知識を学びつつ深い学びにつながるための今後の講義課題について報告するものである。

キーワード：アクティブ・ラーニング、乳児保育教材作り、授業の在り方、保育現場と養成校

## 1 はじめに

現在コロナ禍にあり、先々で何が起きるか予測できない時代の中で、現場では保育や教育の質の改善が求められ、保育の転換期を迎えている。それに伴い、保育現場は保育の質の改善要素として、子どもの「主体性」「生きる力」「非認知能力」を育む保育が重要視されている。

また、保育所保育指針では、幼稚園教育要領と幼保連携型認定こども園教育保育要領との整合性が図られ、子どもの生活や遊びを通して行われる総合的な指導と子ども理解に基づいた実践力も求められている。養成校の限られた授業時間内でこれらの課題実践力を習得できるようにしていくには、授業の中で如何に「主体的で対話的で深い学び」を体験することができるかが必要である。それにより科目の中で学生自身の力で課題を乗り越えていける実践を行い養

成していかなければならないと考えた。養成校時代に養うべき「傾聴力」や「課題の解決に向けて他者と協力し達成する力」を養えることは、学生にとっても貴重な経験になる。深い学びを得て、保育の実践力に繋げていくために従来型の講義形式の中で現場知識を多く取り入れた授業に加え、コロナ禍で密にならない工夫を施しながらアクティブ・ラーニング法の授業や演劇的手法を活用した授業をそれぞれの科目や学年の質、理解度に合わせて行った。

本稿は、深い学びを得て現場での実践力につなげていくために様々な授業の実践や学びの形態を実践し、過程や結果を省みながら実践後の今後の授業課題を報告したものである。

## 2 現場知識を盛り込んだ講義形式の授業形態について

### 2・1 実践内容

各科目の授業は、原則 90 分の授業で行われている。「乳児保育 I」においては、前期科目内容が主として児童福祉におけるの条文や乳児保育の歴史、現状や課題、基本的な知識の習得を図る内容であり、主に従来型の講義形式の授業形態で行った。学生が興味を持ちやすいように講義形式の授業の中に現場エピソードや知識を教科書内容と合わせてスライド内に入れ込んだ。

講義の合間には、現場で行っている季節の遊び（スライムなどを通した感触遊び体験）や乳児向けシアター（パネルシアター、手遊び、絵本など）の実演を行い、従来型の講義に加えて現場保育の実践に触れる機会をつくった。また、前期講義修了後には、講義室の一角に保育で活用するシアターの型紙や手遊び歌、教材、現場の行事に合わせた職員間の連携方法、現場で子どもに人気がある歌、子どもと保育者の関わりをエピソード記録として綴ったものを定期的に更新し掲示し発信する「保育現場コーナー」（写真 1）を設けた。授業内容に関連した内容や実習先や現場ですぐに活用できるものを提示することで授業への興味、関心、理解度、保育現場へのイメージを高めることを目的とし、授業の合間や休憩時間にいつでも手に取って見ることができ、製作したいときに製作ができるような環境を設定した。

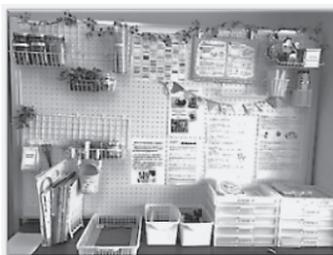


写真 1 保育現場コーナー

## 2・2 現場知識を盛り込んだ講義形式の授業形態学修成果把握アンケートによる評価

従来の講義形式の授業の中に現場エピソードや現場知識を教科書内容と合わせてスライド内に入れ込んだ講義内容でアンケートを行った。前期15回の講義で開講時と修了時の学修成果把握アンケート(表1)の項目と内容は以下の通りである。(保育学科1年生44人が「乳児保育I」の講義に対して回答したもの)

表1 学修成果把握アンケート

以下の10項目についてA(当てはまる)、B(やや当てはまる)、C(当てはまらない)、の記号に○を付けてください。		初回	修了時
1	乳児保育の現状と課題について理解している。	A B C	A B C
2	子ども・子育て支援新制度の仕組みについて簡単に説明できる。	A B C	A B C
3	「保育所保育指針」における乳児保育のポイントや改善点について簡単に説明できる。	A B C	A B C
4	6ヵ月未満児の発達と保育内容、配慮すべき点について知り、保育の実践を行うことができる。	A B C	A B C
5	6ヵ月から1歳3ヵ月未満児の発達と保育内容、配慮すべき点について知り、保育の実践を行うことができる。	A B C	A B C
6	1歳3ヵ月から2歳未満児の発達と保育内容、配慮すべき点について知り、保育の実践を行うことができる。	A B C	A B C
7	2歳児の発達と保育内容、配慮すべき点について知り、保育の実践を行うことができる。	A B C	A B C
8	乳児期に多いトラブルや健康・安全管理について理解している。	A B C	A B C
9	乳児保育における職員間、各機関、家庭、地域子育て支援等との連携について理解している。	A B C	A B C
10	乳児の発達を促す遊びや玩具について知り、手作りおもちゃを製作することができる。	A B C	A B C
* 修了時に回答してください。			
○開講時に比べて知識・理解・技能が向上した項目数は10項目中(            項目)			
○この授業によってあなたの知識・理解・技能は (③向上した            ②やや向上した            ①余り変わらない)			

各10項目についてA(当てはまる)を3点、B(やや当てはまる)を2点、C(当てはまらない)を1点に換算して平均ポイントを算出したものである。授業把握アンケートにおける学修成果の集計結果は、「開講時に比べ、知識、理解、技能が向上した」の項目における割合85%「修了時のA達成項目の割合」40%、授業による「知識・理解・技能」の向上について、

「向上した」61%（27人）「やや向上した」32%（14人）「余り変わらない」7%（3人）であった。

講義形式授業は、一方的な伝え方になりがちだが、より具体的な事例や現場のエピソードを盛り込むことで学生が興味を持ち、理解度の向上に繋がったと考えられる。

### 2・3 授業の評価と課題・改善

基本的な知識の習得が前期講義の目標であったため、従来の講義型形式が多くなる上に、現場知識を盛り込み過ぎたためにスライドが長くなってしまい、スライドをめくる時間配分が難しく、学生が習得しにくいという点が課題となった。その為授業内では、講義の進み方やスライドのめくり方が速く習熟度を深めるところまで及ばなかった。また、自分の考えを記入するワーク形式を所々取り入れて行ったが教科書の内容にプラスして付け加え、現場に出る上で知っておいて欲しいこと（乳児保育の基本、職員同士の連携の大切さ、安全面について）など入れ込み過ぎた為、同じく時間配分が課題となった。

授業評価では「スクリーンの字が小さくて見にくい」「めくりが速い」などが多くあげられた。後期講義では、それらの改善を行い、スクリーンの枚数、字の大きさ、めくりの速さの改善を行った。授業内容の質問や疑問に加えて、保育現場の疑問や質問を毎回の講義の中で質問シートを配布することで改善を行った。質問シートに書かれた質問は、次の講義にスライド内で示し回答して更に単語帳に写し、誰もがいつでも見られる状態にして講義室の保育現場コーナーに設置している。また、前期講義修了後に課題としてあがった「講義内での現場知識を入れ込み過ぎるのを防ぐため、講義以外で現場の知識や情報を学生に伝える方法として教科書の内容はスクリーンで示し、内容と付随する現場の知識は別プリントで示し分けることで、解りやすく習得でき理解に深化を図ることができるように改善した。

## 3 アクティブラーニング・グループワークの授業形態について

### 3・1 内容

保育の仕事は、人との関係性の中での協同や連携、職員間の伝達や共通理解によって成り立っている。職員間の話し合いの中で他者の意見を聴いたり、自分の意見を伝えたり、相手と意見を交わしながらより良い子ども理解や職場環境に繋がるものである。

保護者との関係性においても子どもを真ん中において会話や連絡帳を通して連絡を密にとり、信頼関係を培っていくことで子どもの成長を見つめながら連携を図ることが求められる。このようなコミュニケーション能力や他者と協同していく能力は、他者の意見を聴いたり意見交換をしたり、一つの課題について共同活動を行う中で学びあうことから習得できるものであ

る。

現在コロナ禍にあるが学びに必要なワークは輪にならずに話し合えるように大判用紙を窓やホワイトボードに予め貼っておき、自分の意見を書いた付箋を持ってそこに貼りに行くなど密にならない工夫や換気、消毒の徹底、ワークによっては空き教室の移動など細心の注意と配慮をしながら授業内のアクティブ・ラーニングやグループワークを行ってきた。これらの活動を通して、コミュニケーション能力や自ら考え創造する力を養い、学びを深めていくことをねらいとした。学生の座席については毎回指定して講義を行っている為、アクティブ・ラーニングの際は毎回違うグループのワークとなり得る。自由な着席にすればいつも決まった人とのグループワークになり得るが、毎回違う人とのグループを作ることでそれぞれの良さが発見でき意見を聴く機会を得るチャンスとなり、他者の良さの発見や相手の考えを受け入れることで仲間理解につながるように工夫をしている。

保育学科1、2年生対象に前期2回、上記のような方法でアクティブ・ラーニングやグループワークを取り入れた授業を行った。内容は以下の通りである。

1回目は、保育園のDVDを鑑賞し、写真を見て子どもの気持ちを捉えるワークや保育者の行動を捉えるワークを行った。2回目は七夕行事について下記に示した5つの課題を提示し各グループで調べて話しあいまとめ、代表がプレゼンテーションを行った。3回目は、実習前に各自が立案した指導計画を元にグループごとに演劇的手法を取り入れた実践練習や内容の気づきを深める小グループでのワークを行った。2回目に行った「七夕の行事についての課題」は以下のものである。両学年共に「七夕」に課題を絞りアクティブ・ラーニングを行ったが学年によって内容と課題を変えて行った。両学年共にプレゼンテーションする際は「子どもに伝えるように話すこと」を前提として取り組んだものである。保育学科1年「七夕について」の課題設定についてのグループワークは次の内容で行い、それぞれのグループの代表がプレゼンテーションを行った。

グループ1：七夕の由来について

グループ2：七夕の食について

グループ3：七夕の風習について

グループ4：七夕の飾りについて

グループ5：七夕の短冊について

以上5つのグループであり、入学して初めてのグループワークを協力して行うことができた。

保育学科2年生31人に「七夕について」以下の5つの課題内容(表2)を設定し、それぞれの課題に取り組んだ。

表2 保育学科2年「七夕について」の課題

グループ1	保育園で定期的に行っている園児の集いで七夕の由来を子ども達に伝える時、どのような方法でどのように伝えるかを考え実践すること。
グループ2	5歳児の設定保育で七夕の飾りを制作する時、次の内容を指導の中に入れ意欲を持って活動させる為に、丁寧に飾りの作り方を教えるための準備を考え実践すること。
グループ3	地域によって七夕の風習が違うことを子ども達に伝えるために子どもに「地域」や「風習」をどう伝えるかを考え、伝える内容と工夫を考え実践すること。
グループ4	七夕にちなんだ給食メニューは「七夕素麺」と設定し、この行事食の説明と楽しく食べることができるクラスでの工夫を考えて子どもに解りやすく説明するように発表すること。
グループ5	4、5歳児に「自分で作った笹飾りを笹に付ける」という活動を行う為に、どのようなことに配慮し援助しながら1本の大きな笹に飾りをつけさせるか、子どもにどのような行動をさせたらスムーズに飾り付けができるか考えること。

着目点は、笹の葉に結ぶ作業、飾りを付ける順番（待っている子・飾りをつけている子）、飾り付けを行う際に準備しておくといよい物に着目すること。上記5つの課題を提示しそれぞれの主体性に任せ、分担作業や協同を見守り、時折アドバイスを行いながら取り組ませた。

### 3・2 七夕についてのアクティブ・ラーニングの実践結果

仲間と共同して課題を乗り越えていく力を体験していく経験をすることで現場に出た際に子どもが主体的に動く為の保育の考察や共同作業によって培う傾聴力を養い、他者に共感することで子ども理解に繋がるものである。どのグループも調べてまとめる過程で意見を交わしそれぞれが主体的に動きながら、意欲を持って生き生きと活動していた。それぞれのグループの代表によるプレゼンテーションは、各グループのまとめ方やプレゼンテーション、各グループの良さを見ることができた。また、学生自身が課題を通して「発想力」や「話し合った内容」「共同作業の過程」「考察」をあたたく受け止められ認められたよい体験となった。この体験を積み重ねていくことは、現場の保育実践で必ず役立ち、幼児の発想や行動、気持ちを認めることができる土台となっていくと考えられる。

### 3・3 課題

従来型の一方的な講義形式に比べ、意欲的に取り組むことができるアクティブ・ラーニングは発想力も豊かになり、意見交換も次第にうまくできるようになっていったが保育の現場のイメージや子どもと保育者が関わる場面のイメージが広がらない点では課題であった。課題設定の説明時にイメージにつながるような写真や説明をより細かく行わなければワークが進まなかった。今年度は、保育実践の経験のために本学の付属幼稚園で独自に行っている体験実習が新型コロナウイルス感染症拡大のリスクを考慮し行うことができなかつた点も多いに影響していると考えられる。この授業後に出た課題によって、学生が保育現場のイメージを広げることができるように「保育現場コーナー」の掲示内容も講義に連動した内容やイメージを広げ学びに

繋がる内容を掲示するようにした。

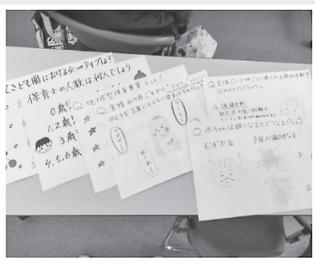
### 3・4 アクティブ・ラーニングの学びを夏休みの課題へ発展させる

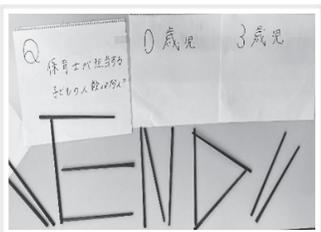
保育学科1年生44名に「乳児保育Ⅰの夏休みの課題」として、「乳児の五感を刺激する玩具作り」と前期授業の中から自分の好きな項目内容を選ばせ「楽しみながら学べる教材作り」を課題として提示した。前期内容は条文や乳児保育の歴史、現状や子育て支援新制度の仕組みなど学生にとっては覚えにくい内容であった。しかし、保育者を目指す養成校の授業内容としては必要な知識であるため、前期内容の復習としての観点と、前期のアクティブ・ラーニングの講義実践を踏まえ敢えて「夏休み」という学生たちが一堂に会する機会が少ない状況下で「連携」や「協働」の観点を入れ、連携や共同作業の進め方、役割分担と伝達、協力をして教材作りを行う上で保育学科としての要素や特色も生かしながら「楽しく学べる教材を製作すること」を目的とした。

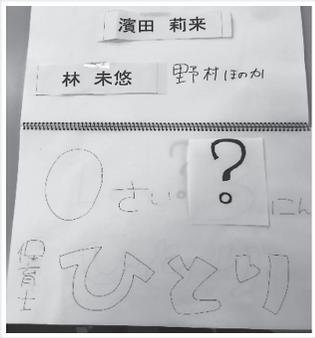
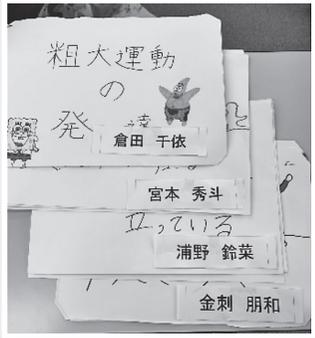
課題については、学生のイメージが膨らみやすくするため、替え歌（童謡でもヒットソングでもよい）、かるた、パネルクイズゲーム、ペープサート、ジェスチャーゲーム、その他（オリジナルのアイデアで作成してもよい。）の5項目を提示し、好きな項目を自由に選択できるようにした。

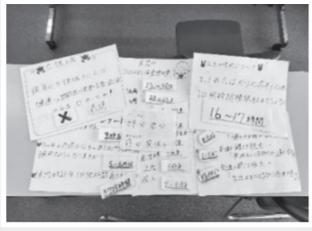
実際に学生が取り組んだ教材の種類や内容についてまとめたものが表3である。

表3 「乳児保育Ⅰ」 楽しく学べる教材作り（令和2年度 保育学科1年生 44名）

No.	種別	製作人数	ねらい・教材名	内容	感想・改善点他
1	クイズ	7人	前期の授業を楽しく振り返る  (教材名)「復習クイズ」	前期授業内容の重要箇所をクイズ形式にした  	絵を描くのが大変であったが、見映えよく仕上げることができました。

No.	種別	製作人数	ねらい・教材名	内容	感想・改善点他
2	クイズ	3人	クイズ形式で楽しく復習できる  (教材名) 「原始反射なーんだ」	主に「原始反射」に内容を絞りクイズ形式にした  	夏休み中でなかなか会えない為、連絡を取り時間がかったが様々な絵が仕上がりが良かった。文字の工夫を行えばよかった。
3	クイズ	8人	箸の数で保育士配置基準を解りやすく示す  (教材名) 「10本アニメ 配置基準クイズ」	子どもから人気のあるテレビ番組のアニメを参考にして保育士の配置基準を箸で表現し示した  	打ち合わせ不足であった。練習時間の確保ができればもっと良いものができた。
4	クイズ	4人	クイズで楽しく覚える  (教材名) 「子どもの発達クイズ」	発達障害児の理解や援助について示したもの  	他グループと同じ内容にならないと予想して内容を選んで取り組んだ。クイズの問題が足りなかった。
5	かるた	4人	粗大運動について楽しく覚える  (教材名) 「粗大運動かるた」	0カ月～15カ月までの粗大運動について  	赤ちゃんのシルエットを描くのが難しかった。絵と文字、シルエットなどペンで濃淡をつけ見ても分かりやすいよう工夫した。

No.	種別	製作人数	ねらい・教材名	内容	感想・改善点他
6	かるた風クイズ	6人	前期内容を振り返り楽しく復習する  (教材名) 「かるた風クイズ」	前期内容の重要箇所をかるたにしたもの  	自分自身も復習できた。かるたで遊びながら楽しめる工夫をするのが楽しかった
7	クイズ	4人	必ず覚えなさいといけな いことを覚える  (教材名) 「保育士配置クイズ」	保育士の配置基準をスケッチブックシアター形式にして楽しく復習する  	もう少し時間を掛け、クイズ内容を増やせばよかった。
8	替え歌	4人	子どもの発達段階を知名度の高い「となりのトトロ」の曲に合わせて楽しく覚える。  (教材名) 「となりのトトロの替え歌で粗大運動の発達」	粗大運動について、トトロの曲に合わせて覚えることができる。  	教科書を見直し、復習しながら製作できた。リズムに合わせて楽しく歌いながら覚えることができた。みんなも口ずさみ、発表も楽しかった。

No.	種別	製作人数	ねらい・教材名	内容	感想・改善点他
9	クイズ	3人	前期授業内容を振り返り、理解を深める  (教材名) 「乳児発達クイズ」	保育の5領域や乳児の体重増加、乳児の睡眠について復習する。  	丁寧に仕上げる事ができ、良い教材ができたと思う。磁石を使って工夫も行った。
10	スケッチブックシアター	1人	前期15回の講義内容の中で大切だと思うポイントを絞り復習できる。  (教材名) 復習スケッチブックシアター		イラストをネットから取り込む作業とコンビニで印刷をすることが大変だった。

#### 4 夏休みのグループワークを取り入れた教材作りのアンケート結果

後期授業1回目に乳児保育の手作り玩具と教材製作の課題発表を行った。教材を製作する上でねらいや製作内容、取り組んだ人数、感想や改善点を入れグループごとにプレゼンテーションを行った。また、前期授業内容と合わせて夏休みの課題を行った上で「アクティブ・ラーニングやグループワークによって学びが深まったか」の質問に、保育学科1年生44人中23人は「学びが深まったように感じる」、19人は「学びがあったと感じる」、2人が「そう感じない」という回答であった。(図1)

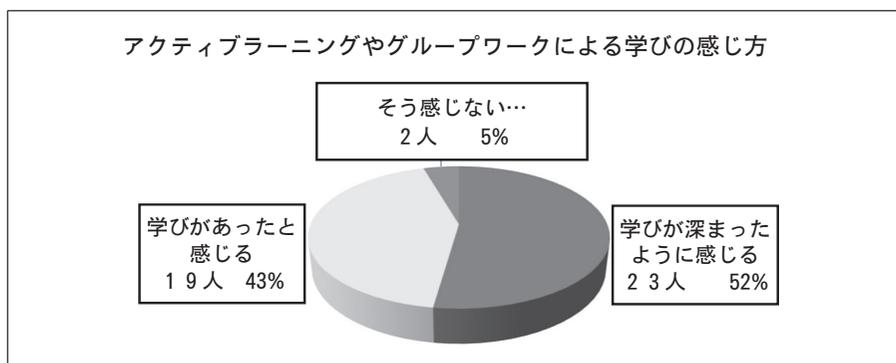


図1 アクティブラーニングやグループワークによる学びの感じ方

また、夏休みの教材作りを通して「人との連携や協力して取り組み製作をしたりすることに楽しさや喜びは感じたか」の質問に対しては、「十分感じた」と解答した学生が70%、「まあまあ感じた」と解答した学生は25%、「感じなかった」という学生は5%であった。(図2)

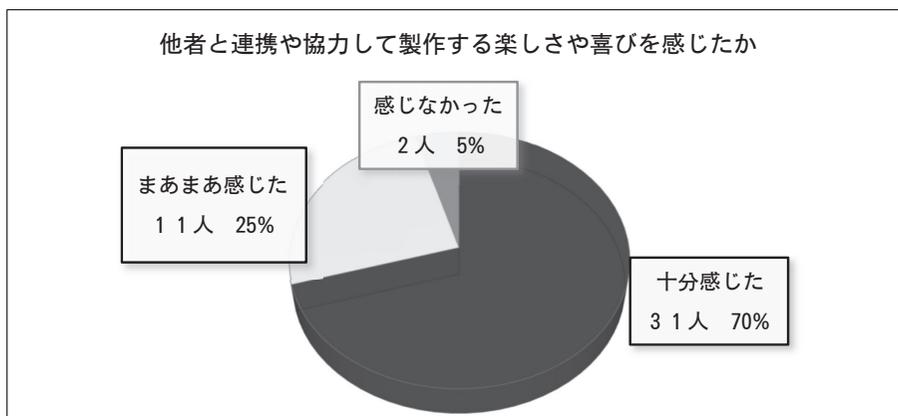


図2 他者との連携や協力して製作する楽しさや喜びを感じたか

## 5 プレゼンテーション・他者の作品からの学び

学生が製作した教材は主にクイズが多く、取り組みやすい点で選択したと見られる。また、各グループそれぞれの工夫や製作過程でのやりとりが垣間見られる場面もあった。学生は、他のグループのプレゼンテーションを観ることで「もう少し工夫すればよかった」「教材の製作枚数をまだ増やせばよかった」「プレゼンテーションの練習時間をしっかりとればよかった」など自主的に振り返りが行い、プレゼンテーションによる学びがあり、入学3ヶ月に行ったグループワークよりはるかに自ら感じたことを言葉で表現できるようになり、振り返りを行うことが自然にできるようになった。学生同士が良い影響を与え合うという現状がその後の授業の中でも垣間見られ、「伝え合うことや表現することでコミュニケーション能力を養うことに繋がった。特にNo.6の「かるた風クイズ」は前期乳児保育の授業内容のポイントを絞り、集約して作成した「かるた」であり、かるた1枚1枚を丁寧に製作していることに他学生は感心したようであった。解答にポイントをつける工夫と高得点を獲得すれば景品がもらえるという工夫に「すごい!楽しい!」などの声があがり、いち早く解答しようと教科書をめくって調べる姿が見られ大いに場が盛り上がった。

他者のアイデアを知ることで自分の中で広がるイメージが明確になり、新たな発想や自分の作品の改善点も考えることができたようである。また、No.8は、粗大運動の発達の段階を、知名度が高く親しみがある「となりのトトロ」のメドレーにのせ、替え歌を製作した。粗大運動の発達を覚えやすく工夫しており、誰もが口ずさみたくなるような替え歌であった。どの作品

も、他者と協働して意見を交わしながら作り上げたことがうかがえる作品であった。「協働」と「コミュニケーション」、「プレゼンテーション」や「鑑賞」により刺激しあうことができ、保育の玩具を通して多くの成果となった。プレゼンテーション終了後は、秋に開催される本学の「学園祭・オープンキャンパス」で「保育学科1年 乳児保育I作品」として展示をした。

## 6 まとめ・養成校の課題

こうした結果から、保育者養成校では、限られた講義時間内で現場での実践力に繋がるように「習得しやすさ」を工夫していくことが課題であると考えられる。

主体的に学びへ向かえるような仕組みをつくと共に、実践に繋がる内容で深い学びを得ることができるような講義をデザインしていくことが重要である。時間内で「やりきったという満足感」や「他者との繋がり」を感じ、「他者との協働によって主体的に対話的で深い学び」の積み重ねの体験を「自信」に繋げていくことが現在の学生には必要ではないだろうか。

実習を体験するために必要である「何があっても逃げ出さず乗り越えられる力」の原動力となるものであり、学生生活や授業の中で培っていく「協働からの学び」は他者を信頼することに繋がり、現場で職員間の連携を図ることに役立つものである。学びを得て、是非とも現場で職員間の対話や子どもや保護者に寄り添っていく「心」を大切にしたい保育者になって欲しいと思う。

また、学生が2年間の学校生活の中で、「保育者を目指す」というモチベーションが揺らぐことのないように夢の実現を支えていく努力を惜しまずに行うことや、学生の前で教壇に立ち、教科内容とは別に「人間性を養い、支え、教える」ことに責任を持っていく必要性を感じる。教員自身も常に講義内容に付随する話の中で「保育者としての人間性の育成」と「社会人として2年後に巣立つ為の育成」の観点を踏まえて授業として与えられた時間内で学生の心に触れる話を繰り返し入れていくことや自分自身の指導内容を振り返り、向上心を持って学生と関わるのが大切である。

学生の「保育者を目指す」という意識の継続を支える為には、学生の日頃の行動や態度の変化を捉えていく力を教員が持つことが大事であり、モチベーションの継続を持続させるには心の変化のタイミングを逃さず、タイムリーに学生の心に届くように言葉を使って繰り返し意識の中に入れこむことも必要である。学生の心に響く内容をタイムリーに話すことは、心を刺激することになるため意識の変化が起こりやすくなり、意欲的で自主的に学ぼうとする姿勢と学生生活の中で自分自身の在り方に繋がっていくものである。「クラスとしての場」がないような短大生活の中で、一人一人の個性を捉えて個人を大切にしたい指導で磨き、現場へ送り出すことは、現在の養成校の使命であるとも考えられる。「質のよい人間性を持つ

た学生」を養成していくことを課題とし、その人間性を育成していくことが子どもの未来に貢献していくことを目指すことになり授業形態の在り方と共に課題となるものである。

#### 参考文献

- 1) 小林由利子・椛島香代・木村浩則・花輪充：演劇的手法を活用したアクティブ・ラーニングの可能性—保育者養成における授業事例を中心に—, 文京学院人間学部研究紀要, vol.19, pp.135-147, (2018)
- 2) 齋藤史夫：教員・保育者養成と「アクティブ・ラーニング」— 児童家庭福祉・特別活動論における「絵日記ワーク」, 埼玉純真短期大学研究論文集, 第9号, pp.55-62, (2016)
- 3) 西隆太郎・伊藤美保子：保育の計画を立案することの意味—保育の専門性と実践の視点から—, ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学・児童学・食品栄養学編, 38巻1号, pp.93-100, (2014)
- 4) 大和田 明見・関根 美保子・鈴木 春江：保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化, 帝京大学教育学部紀要, 2巻, pp.275-284, (2014)